

SHOW HEY シネマール

★★★

パリの家族たち

2018年/フランス映画

配給：シカ/103分

2019 (令和元) 年 6 月 30 日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

監督・脚本：マリー＝カスティエ
ユ・マンシオン＝シャル
出演：オドレイ・フルーロ/オリヴィ
ア・コート/クロチルド・
クロ/バスカル・アルビロ/
カルメン・マウラ/マリー・
クリスティエヌ・パロー/ニ
コール・ガルシア/ノエミ・
メルラン/ジャンヌ・ローザ
/ヴァンサン・ドゥディエン
ヌ/バスカル・ドゥモロン/
ギュスタヴ・ケルヴェン

■ショートコメント■

◆女性の生き方は時代ごと、国ごとに様々だが、多分、現在世界で一番自由に生きているのはパリの女性たち。それが私の認識だが、その自由の裏には様々な葛藤や闘いがあるのは当然だ。しかし、多様な女性たちの多様な自由な生き方を描いた女性群像劇たる本作は、当然のごとくフランスで登場！

自由を求める若者たちの生き方は、いつの時代でも、どここの国でも、自由の裏に葛藤や闘いを抱えているので、いつの時代でも、どここの国でも面白い“青春群像劇”として登場するが、本作ほど多様な女性の自由な生き方を巡る女性群像劇を描ける国はフランスだけ！

◆とはいっても、ベビーシッターのテレーズ（カルメン・マウラ）、花屋のココ（ノエミ・メルラン）、そして舞台女優のアリアン（ニコール・ガルシア）等の女性たちの登場は誰でも「なるほど」と納得できるし、それなりに共感できるもの。しかし、ある意味で本作の目玉ともいえる女性大統領アンヌ（オドレイ・フルーロ）の登場は如何に？

折りしも、6月28日～30日は大阪でG20サミットが開かれ、フランスからはマクロン大統領が出席したが、その存在感と役割はイマイチだった。ドイツのメルケル首相も、イギリスのメイ首相も“落ち目”の現状の中でサッパリだった。

しかし、本作のスクリーン上にフランス初の女性大統領となったアンヌが職務と母親業をどうやって両立させればいいのかと悩む姿が映し出される。一人の女性としてそんな悩みを持つのは当然だが、私が思うに、それでは女性大統領失格なのでは・・・？

私は近時ずっと、華流のTVドラマ『ミューユ』を見ているが、そこに登場する秦の国王のリーダーシップとつい比較してしまっただが・・・。

◆三人姉妹の物語はいろいろあるが、本作では①小児科医をしている長女イザベル（バスカル・アルビロ）、②2人の子供を持つシングルマザーでジャーナリストの次女ダフネ（ク

ロチルド・クロ)、③独身を謳歌する大学教授の三女ナタリー(オリヴィア・コート)が彼女らの母親ジャクリーヌ(マリー・クリスティーヌ・バロー)との複雑な関係を巡って葛藤する姿が描かれる。ストーリーとしてはこれが最もしっかりしていて面白いが、“争点”はかなりシビアだ。シングルマザーも悪くはないし、大学教授が教え子と恋愛を楽しんで何が悪い、という考え方も否定はしないが、やれやれ・・・。

本作を監督したマリー＝カスティーユ・マンシオン＝シャル監督はもちろん女性だが、彼女の関心は「仕事と母親業の両立」にあるらしい。つまり、この問題については「すべてが解決したとはとても言えません。女性が母親業とキャリアのどちらも犠牲にせず、両立できるように条件と手段を提供するまでには全然なっていません。そして役割分担に関しては、まだまだ進歩が必要です。」という問題意識から、本作を監督したらしい。それはそれでわかるのだが、やはり亭主閑白色が強い男の私には、本作はイマイチ・・・。

2019(令和元)年 7月 2日記